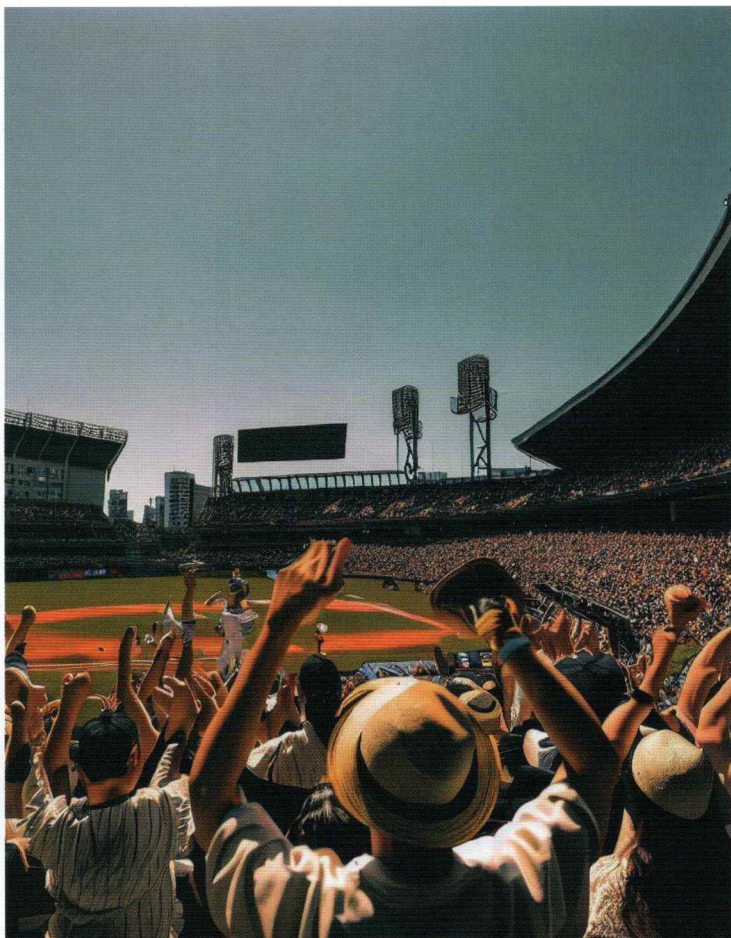


和顔愛語

寺報

令和5年9月号



喜びを分かち合う — 随喜の実践 —

第

105回全国高等野球選手権大会では、慶応義塾高等学校が仙台育英学園高等学校を8対2で破り、107年ぶりの優勝でニュースを大いに賑わせました。

決勝戦に至るまでの各試合で、全ての選手が死力を尽くしてプレーし、勝利を決めて大きな喜びを分かち合う姿は、応援する私達にも力を与えてくれました。

喜びを分かち合うこと、誰かの喜びを自分の喜びとすることを、仏教では「随喜」といいます。逆に、選手が活躍できないときには落胆し、チームが連敗すると怒りがこみ上げることもあります。このような感情の共有は、スポーツを観る醍醐味でもありますが、喜びを分かち合う随喜が簡単ではないことも教えてくれます。

人は、自分の感情に大きく左右されます。嬉しいときは、幸せな人を見て喜びを感じることができず、苦しいときにはそうはいきません。不幸のどん底にいれば、誰かの笑顔を見て自分の境遇をなげき、幸せな人を見て不幸になれ

ばと思ってしまうこともあるでしょう。感情から自由になることはとても難しいことです。しかも心はコロコロと変化し、人間関係や職場環境が悪くなれば、気持ちも落ち込み、長期間そういった状態が続けば病気になることもあるでしょう。心をコントロールすることは、実に難しいことなのです。

極楽浄土に先立たれたご先祖様は、今、その心を上手にコントロールして過ごされています。それは阿弥陀様のいらっしゃるお浄土が不安やストレスを感じることがない環境で、いつでも穏やかな心で生活することができるからです。だからこそいつでも誰かの喜びを自分のものとして共に喜ぶ随喜を実践することができます。

私達が嬉しいときや幸せなとき、亡くなったあの方も共に喜び、幸せを感じてくれています。秋のお彼岸には、私達の幸せを願うそれを共に喜んでくれるご先祖様のために、手を合わせる時間をもちましましょう。

お経の意味を知ろう
～日常勤行式編～
最終回

そうぶつ げ
[送仏偈]

浄土宗では「日常勤行式」と呼ばれる式次第
のつとに則って読経します。式次第に書かれているお経
（偈文）について解説します。

しょうぶつずい えんげんぼんこく
請仏随縁還本国

ふさんこうけ しんそうぶつ
普散香華心送仏

がんぶつじ しんようこねん
願仏慈心遙護念

どうしようそうかんじんしゆらい
同生相勸尽須来

十念 (南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏…)

【意識】

どうぞ仏様、お浄土にお帰りください。香をたき、花を散らして、心からお送りいたします。願わくは、すでにお浄土にお生まれになったご先祖様とともに慈悲の心をもって、お浄土から私達をお守りください。南無阿弥陀仏…。

「お経ってどんなことが書かれているの？」誰しも一度はそんな疑問を持ったことがあるのではないのでしょうか。

お経はお釈迦様の教えを文章にまとめたものです。「二」では日頃のおつとめ（勤行）で読経する式次第をまとめた「日常勤行式」を丁寧に解説していきます。

【解説】

浄土宗日常勤行式の締めくくりにしておとなえするのが「送仏偈」です。「おつとめ」

ます。

のはじめに「三奉請・四奉請」をとなえてお迎えした仏様を、お送りする意味があり

様と共に見守っていてくださいと心を込めてお願いをしつつお送りするのです。その願いを受け取り阿弥陀様、ご先祖様も笑顔で見つめてくださることでしょう。こうして仏様をお見送りした後、心静かにお十念をとなえておつとめを終わります。

奥様が亡くなられた当初は想像を絶する悲しみの中で生きてこられたことは想像に難くありません。しかし、日々の生活に祈りの時間を持つことで少しずつ悲しみを昇華され、いつか叶う極楽での再会の日を確信され、晩年はそれを「幸せ」と表現されました。

「日常勤行式」は、「日常」の語でもわかるように、毎日勤めるのが理想です。日々仕事や家事、学業など様々な忙しい中で「毎日」ということはなかなか難しいことですが、あるお檀家様の生き方を紹介したいと思います。

浄土宗では来年に控える開宗850年に「お念佛からはじまる幸せ」というテーマを掲げていますが、日々のお勤め、お念仏には「絶望」を「希望」に変える力があります。大切な方のため、そして自身のためにお勤めを日々の日課にされますよう。

教本のお求めはコチラ



A5版 48頁 275円 (税込)
発行：浄土宗出版
問い合わせ先：同出版
03-3436-3700

(終)

伝えたい言葉 (12)

露の身は

ここかしこにて

消えぬとも

こころは同じ

花のうてなぞ

(法然上人の和歌)

〈現代語訳〉

私達の命は、朝露のようにはかなく、死にゆく定めにあります。が、お念仏をとなえる私もあなたも極楽浄土に咲く同じ蓮の台のなかに生まれ変わり、また会うことができるのです。

法然上人が生きていた時代は、源平の戦いが激化した時期です。1183年7月、木曾義仲が軍を率いて京に入りました。50

歳を超えていた法然上人は、出家以来この日初めて經典の勉強ができなかったと言っています。上人は武士が激しく争い、その中で東大寺が焼失し、たくさんの人々が命を落とす様子を目にしたことでしょう。そして、上人自身も様々な苦難を経験しました。

一番の困難は1205年に起きた「建永の法難」と呼ばれるできごとです。奈良の寺院から法然上人のお念仏の教えに対する批判が先鋭化します。そのなかで上人の弟子達がトラブルに巻き込まれ、上人は念仏教団の代表としてその責任を問われ、還俗させられました。そして土佐（高知県）へ流されることになりました。この時、法然上人と親交が深く有力な公家であった九条兼実がとりなして、兼実の支配地域であった讃岐（香川県）に行き先を変更しました。この時、兼実は法然上

人に「これが今生の別れになるかもしれないね」と伝えました。これに対して法然上人が返した歌が、ここで紹介した「露の身は」ではじまる短歌です。

当時、兼実は57歳、法然上人は73歳でした。平安時代の平均寿命は男性で50歳だったそうですから、二人ともいつ死んでもおかしくない年齢であり、離れ離れの土地で死んでいくことを覚悟していたことでしょう。そ

んななか、どこで死んだとしても極楽浄土で会おうと上人は兼実に伝えたのです。

いまよりもはるかに命が軽い時代。多くの人が病院のベッドの上で亡くなる現代とは違いますが。死に場所がどこになるかわからない、死に目に会えるかもわからない。そのような状況で極楽浄土での再会は、希望だったことでしょう。そして心からそれを信じてお念仏をひろめる法然上人は、たくさんの人々の希望の星であったに違いありません。この星の光はいまも輝き続けています。

いつの時代でも人間はいつどこで死ぬかわかりません。そんなはかない命を生きる私達は、南無阿彌陀仏をとなえることで、極楽浄土での再会を果たすことができます。あとは自分自身がそれを信じておとなえするだけ。心と心がいつか極楽の蓮池のなかで相まみえることでしょう。



Q&Aですぐわかる! なるほど浄土宗

⑭

身近な仏教の疑問をQ & A
形式で説明します!

—お念仏をとなえられない人は極楽へ往生できないのでしょうか?

—往生できます。お念仏は「なむあみだぶつ」となえるだけのとても簡単な実践です。いつでも、どこでも、だれでも行うことができます。

こう聞くと、「それでは声を出せない人はどうなるんだろう」と疑問を持つ方もいるかもしれません。これを心配する必要はなく、声が出せなくても、お念仏とふれ



あい、またその実践を行うことができます。

例えば「南無阿弥陀仏」のお

念仏を写経することや、心の中で南無阿弥陀仏となえることは、立派なお念仏の実践になります。

浄土宗には撰心念仏せんしんねんぶつというお念仏のとなえ方があります。聞こえるか聞こえないかわからない、かすかな声でおとなえするお念仏です。コロナ禍においては「心の中で『なむあみだぶつ』とおとなえください」と、お話させていたできました。はつきりとなえることはもちろん大切なことですが、それだけがお念仏のすべてではないのです。

阿弥陀様はさとりを開き、とても小さな声を聴いたり、私達の心のなかを察したりする力を持った仏様です。病気になって大きな声が出ないとしても微かなお念仏の声を聞き渡らすことはありません。また声を出すことが難しくても、南無阿弥陀仏という心の声を聞いてくれます。

お念仏の実践は阿弥陀様とのご縁を深めるものです。自分にできる形でやってみることが何よりも大切です。

令和版結縁交名のご案内

令和6年は法然上人が浄土宗を開宗されて850年目という節目の年です。

—南無阿弥陀仏となえれば、すべての者が救われる—この教えに出会い、広められた法然上人。

法然上人の弟子である源智上人は、法然上人の一周忌にあたり供養のため、一体の阿弥陀如来像を造立しました。お像の中には、造立にあたってご縁を結ばれた四万六千人の名が連なっています。それだけの方々が、お念仏とのご縁を結び、極楽浄土を願ってきました。

令和に生きる私達も、往時

の人々と変わらぬようにお念仏をとなえ、法然上人の御教えとご縁を結びましょう。同封したパンフレットとともに「なむあみだぶつ」「南無阿弥陀仏」と書かれた和紙がありますので、なぞり書きをしていただき、お名前を記したうえで、当山までお持ちください。お持ちくださった方には左にあります限定の透かし入り御朱印を贈呈いたします。いただきました全てのお名前は浄土宗にて源智上人造立の阿弥陀如来像の御前(総本山知恩院)に奉納いたします。



法然上人

浄土宗

開宗850年

お念仏からはじまる幸せ

令和6年

